新聞　第3種郵便物認可

多士済々
メードイン岡山 8

第1部「個性派列伝」⑧ 三陽機器

フロントローダー

ヤンマーやクボタに供給
30年国内首位 シェア7割

農業用のトラクターが、あっという間に小型のブルドーザーやショベルカーに―。

こんな変身を可能にする機器がある。「フロントローダー」。前部に取り付ける油圧式積み込み装置のことだ。

土砂や資材、牧草、稲ワラなどの運搬、整地に除雪…。ローダーを付け替えるだけで、一台のトラクターが多くの作業で使える。

岡山県南西部、里庄町の三陽機器。町外れの丘陵に立地する中小企業が、トラクター用フロントローダーで一九七二（昭和四十七）年から三十年以上、国内トップに君臨する。シェアは約70％と圧倒的。用途別にラインアップしたローダーは五百種類にも及ぶ。

OEM（相手先ブランドによる生産）に徹しているため表舞台には出ないが、ヤンマー農機（大阪市）やクボタ（同）など総合農機メーカー四社の純正ローダーをすべて供給している。ライバル関係にある大手の純正品を一社が担うのは、どの業界でも極めて異例。

その年に国内初のフロントローダーの開発に成功した。まだ取り外しはできなかったが、五年後に着脱可能なローダーを発売。農業の機械化の進展で、大手メーカーからの注文が殺到した。

製造能力の不足を補う戦略が、同県などの部品製造や加工を手掛ける中小企業への外部委託。これが「多品種少量生産」にマッチした。ただ、品質の最終チェックを兼ねた組み立てと塗装は自社で実施。それ以外は開発と営業に全力を傾注、会社は急成長した。

トラクターの前部に取り付けられたフロントローダー。総合農機メーカーの純正部品は、すべて三陽機器が供給する

外部委託戦略

三陽機器は六六年、兵庫県内の農機具会社を辞めた技術者ら九人で同県尼崎市に設立した。今で言うベンチャー。

「メーカーはもちろん、ユーザーの農家らが支持してくれた結果」

社長の寺前公平（四九）は謙虚に話す。

創業者が井笠地方と縁があったことから選んだ里庄町への本社移転（八八年）も、好循環をもたらした。周辺の岡山県西部や備後地域には、優れた技術力を持つ部品メーカーが多かった。

寺前は「受託を目指して、地元企業がレベルアップとコストダウンを競い合う。当時も今も、当社に大きなプラスに働いている」と説明する。

生産設備へ投資せず、外部委託で高品質、低価格の製品を確保するシステムの構築で、創業以来、赤字は一度もない。

現場とも接点

寺前は毎週、子会社の三陽サービス（里庄町）の報告書に細かく目を通す。中には、農家や農機具営業マンとの会話や苦情などがぎっしり。

「開発、改善のヒントが隠されている。社員全員で共有する」と寺前。

だが、最前線の情報を得るにはOEMの悲哀を味わったという。

フロントローダーの組み立て作業。品質の最終チェックを兼ねている

七〇年代の後半。三陽機器は、メーカーの意見だけでなく農家の声が開発に不可欠と判断。農家が来場する展示会に出向いたが、メーカーは露骨に嫌がった。寺前は「ウチが直接販売に乗り出すと思い、警戒したようだ」と振り返る。

結局、メーカーが持て余し気味のアフターサービスの引き受けで決着。八〇年に三陽サービスを設立し、全国六カ所に拠点を設けるなどの負担と引き換えに、現場との接点をつかんだ。

以後、三陽機器は農家の声を生かして、自動で着脱できるローダー、世界初の電子制御ローダーなどを次々と開発。常に業界をリードする。

しかし、七〇年代は年間二十万台を超えていたトラクター販売は、農業の低迷などで現在は六万台弱。ローダー需要のダウンを見越し、約十年前から環境関連の農業機械開発に着手。樹木を木片チップにする破砕機などを市場に送り出した。

寺前は「原点は現場のニーズ。社是に掲げる『よろこばれる』製品開発を貫く」と力を込める。

（敬称略）

＝第1部おわり＝

第1部は小松原竜司、三木良一、太田知二が担当しました。近く第2部を掲載します。

企業概要

所在地　岡山県里庄町新庄▽設立　1966年▽資本金　6600万円▽事業内容　農業機械、環境関連機械などの開発・製造販売▽売上高　26億6700万円（04年5月期）▽従業員　100人